

夢のような昼と晩

小川未明

青空文庫

赤い花、白い花、赤としぼりの花、いろいろのつばきの花が、庭に咲いていました。そうして、濃い緑色の葉と葉のあいだから、金色の日の光がもれて、下のしめった地の上に、ふしぎな模様をかいていました。

葉がゆれると、模様もいつしよに動いて、ちょうど、水たまりへ落ちた花が、浮いているようにも見えました。

また、どこからともなく、そよ風に、桜の花びらが飛んできました。

「ああ、なんというおだやかな、いい日だろう。」

少年は、うつとりと、あたりをながめていました。

そのとき、ピアノの音が聞こえました。

「前の家のおねえさんも、いいお天気なので、おひきなさる気になったのだろう。」

しかし、これほどよく、音と色とが、調和することがあるだろうか。

少年は、色鉛筆と紙を、そこへなげ捨ててしまいました。なぜなら、花だけをかいても、音をかくことができません。このさい、それを自分の力で表せぬなら、いつそなにも書かぬほうがよかったです。

少年しょうねんは、ただ自然しぜんの美うつくしさと、やさしさに見みとれるばかりでした。

「きのうきようは、花はなのさかりだけれど、一雨ひとあめくれば、みんな散ちつてしましますよ。」

お母かあさんが、けさおつしやつた言葉ことばが、ふと頭あたまに浮うかんだので、少年しょうねんは、いつそうこの景色けしきを、とうとく、いとしいものに思おもいました。

「金魚きんぎょやあ！」と、かすかに呼よび声こえがしました。

たちまち、少年しょうねんの注意ちゆういは、そのほうへとられたのです。すべてを忘わすれて、しばらく熱心ねっしんに耳みみをすましました。

「どこだろうな。」

しかし、それきり、その声こえは聞きこえませんでした。少年しょうねんは、じつとしていられなくなつて、ついに、門もんの外そとへ出でて、方々ほうぼうをながめたのです。

町まちの方ほうへつづく道みちの上うへには、かげろうがたち、空そらの色いろはまぶしかった。しずかな真昼まひるで、人通ひとどおりもありませんでした。金魚きんぎょ売りのおじさんは、きつと、あつちの露路ろじへまがつ

たのだらう。そう思おもつていると、こつちへかけてくる子供こどもがありました。

はじめ、その姿すがたは小ちさかつたのが、だんだん大おきくなつて、よくわかるようになると、手にブリキかんを持もつていました。それは、隣家となりの武たけちゃんでした。

「武ちゃん！ 金魚を買ったの。」と、少年はそつちを向いて、大きな声でいいました。

武ちゃんは、ちよつと、道の上に立ちどまりました。そうして、手に持ったかんをのぞいているようすでした。

これを見た少年は、

「どうしたの、武ちゃん？」と、こんどは、そのそばへと走りました。ブリキかんの中には、一匹の金魚が、あおむけになつて、ぱくぱく、口をやっていました。

「あまり飛んできたから、びつくりしたんだよ。たった一匹なの？」

「まるこの子だよ。尾の短い二匹より、一匹でも、このほうがいいだろう。」

二人ののぞく頭のあいだから、太陽ものぞくように、光はかんの中へ射こんで、金魚のからだに、さんらんとして、真紅に金粉をちらすがごとくもえるのでした。

「きれいだなあ……。」と、少年は、感心しました。

「お家へいったら、大きな鉢へ入れてやろう。」

二人は、走らずに、急ぎ足となりました。

「どうして、こんなきれいな魚があるんだろうね。」

「ほんとうにふしぎだね。」

その日の晩は、またいいお月夜でありました。うす絹のような雲をわけて、まんまるの月が、まんまんたる緑色の大空へ浮かび出るのを、少年は、家の前に立つてながめていました。

いつも明るいのに、こよいにかぎって、ピアノのおねえさんの家の窓は、暗かったのでした。垣根のきわに植わっているみかんの木が、黒々として、夜風の渡るたび、月の光にちかちかと、葉がぬれるごとく見えました。

少年は、なんとなくもの足りなさを感じたとき、ぶんと鼻をうったにおいがあります。

「おや、お薬のかおりだ。」

いつであつたか、少年は、おばあさんの家で、これと同じ薬を煎じるかおりを、かいだ記憶がありました。そのおばあさんは、もう亡き人であるが。はるかな駅を出発するらしい汽車の、笛の音がしました。さびしくなつて、内へはいると、お母さんは、ひとり燈火の下で、お仕事をしていました。

「前のおねえさん、かぜをひいたのかしらん。」

「どうして？」

「お薬のかおりがして、窓が暗いのだもの。」

「そうかもしれない。かぜがはやりますから。」

お母さんは、そうおっしゃっただけでした。少年だけは、いつまでも同じことを考

えていました。

「お母さん、月は、去年の春とちがって、あたりがあんな焼け跡になったので、びつくりしたでしょうね。」と、少年がいました。

「昔から、戦争があると、こんなことがたびたびあったのですよ。平和な春の晩にはお琴の音がしたり、お茶をにるかおりがして、歌にも『あおによし奈良の都は咲く花の、におうがごとくいまさかりなり』と、たたえられた都も、今はあとかたなく、草がぼうぼうとしているのですから、考えれば、ほんとうにさびしいものです。」

「戦争がなければ、いいんですね。」

「だれでも、その当座は、戦争の悪いこと、恐ろしいことを身にしみて感じますが、それを、じき忘れてしまうのです。」

「そんなら、どうしたらいいの。」

「にがい経験けいけんを、いつまでも忘れぬことです。そして、世界せかいじゅうが、平和へいわのために骨ほねをおり、力ちからを合わせて、わがままや、傲慢ごうまんしん心をおさえなければなりません。」

少年しょうねんは、お母さんかあの話はなしを聞くうちに、風かぜの音おとがしたので、せつかく咲さいている花はなの身みの上うえを、悲かなしく思おもいました。

「私わたしたちが、こうして安心あんしんしてくらせるのも、世間せけんに道徳どうとくがあり、秩序ちつじよがあるからです。この一日いちにちを平和へいわに送おくれたら、神かみさまに感謝かんしゃし、正ただしく努力どりよくされた世よの中なかの人ひと々に、感謝かんしゃしなければなりません。」と、お母さんかあは、しみじみと、おっしゃいました。

夜よもふけたのに、よつばらいどうしであろう、あつちの道みちを、ののしりながら通とおるものがありました。

「けんかだな。」

「いやですね。おたがいが大事だいじなからだですのに。」

やがて少年しょうねんは、床とこの中なかにはいると、もう一度ひとこちらを向むいて、

「お母さんかあ、お休やすみなさい。」と、いいました。

そして、柱^{はしら}にかかる時計^{とけい}のきぎむ音^{おと}を聞^きくうちに、いつのまにか、ねむってしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「良い子の友」

1946（昭和21）年6、7月合併号

※表題は底本では、「夢《ゆめ》のような昼《ひる》と晩《ばん》」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢のような昼と晩

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>